不登校・ひきこもりに『**伴走**』して

NPO 法人レインボーハウス　　土井　広行

第８回　　ギラギラしないように

子どもがふと話してくれることに驚かされることがあります。一緒に散歩している時や、部屋で２人だけの時に多いです。

「運動会に行こうか、どうしようか」と話す子どもがいました。私が「今決めなくても、当日の朝に決めてもいいんちゃう」と言うと、少し安心してくれた様子でした。「机を蹴られたりした」と学校での辛かったことについて話してくれる子どももいました。このように、私から尋ねても話さないような葛藤や辛かったことについて話してくれることもあるので、「ふと話してくれる」のは貴重な場面なのです。

私がスタッフとして気を付けていることが、三つあります。一つ目は、不登校・ひきこもりになった原因や将来・進路について、子ども･青年に尋ねないことです。今までに一度も尋ねたことがありません。なぜなら、子どもにとっても私にとっても、何も良いことがないからです。まず、学校に行けない自分を責めている子どもや、将来や進路に不安を抱いている子どもにとっては辛いことです。私にとっても、原因や将来について知ったところで、その子に対する関わり方は変わりません。このように誰も得をしないだけでなく、子どもには辛い思いをさせるかもしれないので尋ねないのです。

二つ目は、ギラギラしないようにすることです。同じ様に「一緒にトランプをしよう」と子どもに言っても、単に一緒に楽しみたいだけの人と、「これで仲良くなって、早く学校に行けるようにならないかな」と思っている人は、子どもは必ず見分けます。ここでの後者を「ギラギラしている人」と私は呼んで、気を付けているのです。

三つ目は、子どものことを「わかった」と思わないことです。当然子どもは私と違う人なので、どんなにわかろうと努力しても、その子の 100%がわかることはありません。だから、「子どものことはわからないけど、少しでもわかろうと努力することはできる」と思って接しています。逆に子どものことを「わかった」と思った時は、「子どものことがわかったと思い込んでいる＝子どものことをわかろうとしなくなっている」状態だと思っています。もし、子どものことを「わかった」と思うようになったら、私にはスタッフを続ける資格がないのです。

＜　2007 年 8 月 18 日　　ニュース和歌山掲載　＞